

英作文のために5文型を見直す

山岡 大基

0. はじめに

学校英文法において「5文型」は相当な存在感を示してきた。しかし、このモデルが英語指導上どれほどの教育的効果をあげてきたか、あるいは今後も活用するに値するかについては賛否両論ある。また言語研究の著しい進展を受けて、これに替わるモデルも模索されてきた。

最近の傾向としては5文型否定論が強いが、その一方で、欠点ばかりがクローズアップされ利点が過小評価されているきらいもある。

本稿では、センテンス単位の英作文指導に焦点を絞って、5文型の特性を踏まえ、指導上の活用方法について若干の提案を行う。

1. 5文型をめぐる賛否

1. 1. 肯定論

肯定論には、英語の文であれば一部の構文を除いてほぼすべてを5つのパタンに分類することができるという、モデルの一般性の高さを支持するものが多い。たとえば小寺(1989)は、いかに長い文でも本質的には5文型の組み合わせに還元できることを指摘し、英作文指導に活用することを提案している。また、田鍋(2000)は、5文型が文の構成要素を統語論的に分析したものであることから英文の理解に役立つと主張しており、7文型等の修正案については、従来の学校英語指導が、文型に依拠しつつも問題点を補う配慮は行ってきたとして、文型の数を増やす必要はないとの立場を示している。

1. 2. 否定論

否定論には、記述の不備と、それに由来する学習者にとっての使いにくさを論拠とするものが多い。たとえば池上(1991)や田地野(1999)は意味と形式との関係に着目して、同じ文型に分類される文でも意味機能が異なる点を指摘し、意味が軽視されている

という主旨で5文型を批判している。

また、Yano(1996)は、日本人EFL学習者を対象とした調査において、ある英文の意味を理解する能力と、その文型を認識する能力とは互いに独立したものであり、特に習熟度の低い学習者ほどその傾向が強いことを示した。これらのことからYanoは5文型の教育的効果に疑義を唱えている。

1. 3. 改良論

5文型の教育的意義よりも、その文法記述としての問題点に焦点を当て、文型モデルの改良を図る立場がある。代表的な例はQuirk et al.(1985)による7文型であるが、他にも安藤(1983)による8文型や吉田(1995)による9文型等がある。また、小寺(1986)による改編5文型や、黒川(1997)による“V”の適用範囲の見直し等、文型の数は増やさずに5文型を新しく解釈しなおす立場もある。

2. 5文型論議の問題点

5文型をめぐる上のように様々な見解があるが、長年の議論から英語指導における5文型の位置づけについて評価が定まっているとはいえない。たとえば20年以上前の研究になる渋谷(1981)は次のように述べている。

「従来、文型といえば、直ちに5文型を思い浮かべるほどにこの5文型は、わが国で広く採用され、特に初期の英語指導では効果をあげてきた。それは英語の文についての概念を総括的に整理するのに便利であり、そればかりか、かなりの程度まで英語の構文の実態に即応していたからであろう。しかし、この5文型をすべての文にあてはめてみようとする、いろいろ不備な点が出てくるということもわれわれの経験しているところである。かといって文型の数を増やせばそれで問題が解決するといったものではないところに文型を考える上

でのむずかしさがある。」

結局のところ、第1節にまとめた議論も20年以上前のこの指摘を大きく超えるものではない。

肯定論では、5文型というモデルの利点を強調するものの、実際どのように用いるかの具体的提案がほとんど見られない。具体的な運用法が明確でなければ、5文型の教育的効果や、どのような学力を伸ばさせるのかについて、渋谷の指摘を超える議論には至らないであろう。

一方、否定論が強いとはいえ、検定教科書の文法解説や学習参考書の多くが5文型を取り上げている実態を考えると、積極的に支持されているわけではないが、かといって有効な代替モデルが英語教育界の共有財産となっているわけでもないことがうかがえる。このような事情は、隈部(2002)の次のような5文型評価にも表れている。

「このいわゆる『5文型』の正当性については、語学者の意見が分かるところである。しかし、この『5文型』が日本の学校教育に定着してかなりの年月が流れ、学習指導要領も、これに準拠する検定教科書も『5文型』に従っている以上、このメリットを生かす方向に向かわざるをえない。」

いわば現状追認的な5文型肯定論であるが、有力な代替案がないことをよく表す指摘であろう。

こういった状況が生じているのは、時間がたつにつれ5文型の本来の意図が忘れられつつあり、利点と欠点を整理したうえでの議論が進められなくなっていることに原因があると思われる。最終的に肯定・否定のいずれに立つにしても、モデルの特性を十分に踏まえないままでは妥当な評価を下すことはできない。次節ではこの点を踏まえて、英作文指導に5文型を活用するとすれば何に留意すべきかを提案する。

3. 5文型の特性

3. 1. 動詞の性質の重視

日本において広まった5文型の原典とされるのが細江(1917: 本稿における引用は1999年刊新訂正版より)である。細江によれば、文型分類は文全体の構造というよりも、むしろ述部の構造を分類するものとして提案されている。細江は英語の動詞を自動詞2種類(完全陳述動詞, 不完全陳述動詞), および他動詞3種類(単純他動詞, 付与動詞, 作為動詞)の5種

類に分類したうえで次のように述べている。

「動詞の性能ないし用法にこの5種の区別のあることは、すなわち文の陳述形式に5個の異なった型を生ずるゆえんであり、したがって文成立の基本形式に5種の差別を生ずるゆえんである。」

このことを踏まえると、単に英語の文が5種類に分類されるという点においてのみ5文型を参照することは、このモデルの本質的な意義を見落とすことにつながる。5文型を活用するためには、動詞の性質に着目し、動詞によって文の構成要素が決まる点に留意するべきである。

3. 2. 「主要素」と「従要素」の区別

また細江の文型分類は、英文を構成する要素を「主要素」と「従要素」に分類したうえで、「主要素」の配列についてのみ述べていることに留意すべきである。つまり、5文型は文を構成するすべての要素の配列ではなく、文を文法的に成立させる「骨格」の部分についてのみ要素の配列を示しているということである。たとえば、

Some scientists in Greece found a better way to predict earthquakes around that time.

において主要素に当たるのは“scientists, found, way”で、それ以外の要素は従要素である。

英作文指導の観点からとらえると、まず主要素を配列して文の骨格を整えたうえで、従要素をつけ加えて文をふくらませる、という方向で指導を構想することができる。

たとえば、従要素のうち特に副詞類は主要素の間に生じることは少なく、主要素がすべて配列された後に位置することが多い。

I bought this book at the store yesterday. という文は、“I bought this book”まではSVOという主要素が配列されて成り立っており、“at the store yesterday”は従要素である。このとき、“I yesterday bought at the store this book.”のように、従要素が主要素の間に生じる文は普通ではない。

このように、5文型からは主要素と従要素の配列という語順についての情報が得られ、下に提案するようなSVO文型を中心とした指導を展開する場合に活用できる。

4. 5文型活用法提案

本節では、上でみた5文型の特性を踏まえ、指導について実際の提案を行う。なお、本節における提案はすべて、指導者が説明したり教材を作成したりする際に了解しておくべき事項として述べてあり、学習者が明示的に知ることは必ずしも意図していない。

4. 1. SVO文型から始める英作文指導

5文型は英語の文を5つのパターンに分類するモデルであるが、指導において5つの文型を同じ比重で扱う必要はないであろう。5つの文型のうち特に基本となるものを設定して優先的に指導を行い、そこからの他の文型に発展させるという、文型間の軽重づけが可能である。特に英作文指導においては語順指導という観点から、そのような段階的指導が必要になると考えられる。

それでは、どの文型を基本とするかという問題であるが、SVO文型が最も適当であろう。というのは、SVOという配列を持つ文型が5つの文型のうち3つを占める(SVO, SVOO, SVOC)ことにも表れているように、SVO文型が英語において最も多産な文型だからである。

たとえば黒川(1996)は、次のような用例が多く見られることからSVO文型が「新しい情報を繰り出す起点」となっており、「SVOが最も普遍度の高い文型として確立しているゆえにこそ、SVOOもSVOCも安定した文型になりえたのではないかと述べている。

I had lunch / with the actress yesterday.

He has written a letter / to his friend.

I have a sick mother / to look after.

また、英語の文は「名詞—動詞—名詞」というリズムを基本として成り立っていると考えられている。たとえば、(a)よりも(b)が多用されるという事実がある。

(a) He looked at the document.

(b) He had a look at the document.

この「名詞—動詞—名詞」のリズムに最も適合するのがSVO文型である。さらに、意味的には「行為者—行為—対象」という構造が英文の基本であると言われているが、SVO文型はこれにも適合している。このような観点からもSVO文型を最も基本的な文型と考えてよいだろう。

なお、SVO以外の文型の位置づけについては、筆者は次のように考える。まずSV文型については、し

ばしば指摘されるように実際の用例が少なく、またSとVという最低限の要素しか含まないため、学習者にとっても容易であり、特に優先する必要はないと考えられる。

次にSVC文型は、“They are...”, “It is...”のような汎用性の高い構文で導入され、またbe動詞・一般動詞併用という誤りが頻繁に見られるため、重点的な指導が必要であろう。しかし、通常この文型を要求する動詞は、be動詞以外にはbecome類、seem類、remain類の3種類とされ、数が限られている。一方で、たとえば

Let's part good friends.

The dog lay motionless.

The building stood deserted.

のように、上記3種類の動詞以外でも、ある行為を行っているときのSの状態を示すために形容詞・名詞がCとして用いられる場合がある。これはかなり生産的な構文で、読解指導等において学習者がつまづきを覚えることも少なくないが、いずれにせよSVO文型のような拡張性がSVC文型にはないので、これを基本の文型と考えるのはむずかしい。むしろSVO文型とは別個の位置づけで重点的に指導する必要があると思われる。

SVOO文型については、この文型を要求する動詞は少数に限られており、また、SVO文型と比較した場合、SVOO文型のほうが意味的制限が強い。たとえば、「与格交替」として知られている次のような現象がある。

(a) The teacher taught English to the students.

(b) The teacher taught the students English.
通常この2文は書き換え可能であると考えられており、実際、知的意味はどちらもほぼ同じである。しかし、これらの意味をより詳細に検討すると、(a)のSVO文型(前置詞与格構文)では単に学生に英語を教えたということだけを述べており、学生が教えられた英語を身につけたかどうかには言及していない。一方(b)のSVOO文型(二重目的語与格構文)では、「学生は教えられた英語を身につけた」という「行為の影響」までが含意されている。このことは、次の2文の文法性が異なることから明らかである。

(a') The teacher taught English to the students, but they didn't teach them

anything.

(b) *The teacher taught the students English,
but they didn't teach anything to them.

このようなことを考慮すると、SVO文型のほうがより基本的であり、そこに上のような含意が付加されているのがSVOO文型であると考えられる。

SVOC文型については、毛利(1972)が次のような説明を与えている。

「S + V + O...」と進んできたとき、『そのOを、あらためて(意味上の)Sと見たてて、それに対して意味上の述語を付加する部分をCと呼ぶ』

この考え方に従うと、SVOC文型はSVO文型からの拡張によって理解することが適当であると考えられる。

以上のことから、英作文指導において5文型を活用するためには、SVO文型を出発点として「名詞—動詞—名詞」、「行為者—行為—対象」という英語文のリズムを学習者に体得させ、そこから他の文型へと発展させていくという方向性が考えられる。

また、英文を作るときに、すべての要素を一度に配列してしまおうとするのではなく、文型の枠組みをまず構成してから、その後ろに必要な情報を付加していくという段階的指導が有効であろう。そうすることで、より確実に英文を構成する力が身につくと期待できるからである。次のような英作文の例を考えてみる。

「彼は弟のためにサッカーボールをその店で買ったことを思い出した。」

(1) 意味の観点からSVO(「だれが／どうする／なにを」)を判別する(主要素の判別)

→彼は／思い出した／【弟のためにサッカーボールをその店で買ったことを】

he / remembered / 【 X 】

(2) 【 X 】についてSVOを判別する

→彼が／買った／サッカーボールを

he / bought / a soccer ball

(3) 従要素をつけ加える

→弟のために／その店で

for his brother / at the store

(4) 主要素と従要素を組み合わせる

→He remembered (that) he bought a soccer ball for his brother at the store.

5. まとめ

以上、英作文指導において5文型を活用する方策について簡単に考察してきた。誤解のないように強調しておくが、筆者は5文型こそが英作文指導において最も効果的なモデルであると考えているわけではない。

5文型に限らず文型論は多くの英文を説明できる一般性の高い規則であるが、学習者が英文を作り出す場合、むしろ個々の動詞の語法やいわゆる「構文」といった、個別性の高い規則に従う場合が多いということはよく知られた事実である。その意味では、けっして5文型が英語指導にとって常に有効であると主張するつもりはない。

しかし、上述したように5文型論議においては、特に否定的な立場からは5文型の欠点ばかりが強調され、このモデルが本来意図していた記述の利点が十分に踏まえていないという問題があった。そこで、あえて「活用するとしたら」という観点から5文型論を試みた。

英語指導における5文型といっても、学習者自身が英語を運用する際に用いる“working grammar”としての可能性と、指導者による指導原理としての可能性がありうる。第4節に示した例題は前者に近いが、直接的に学習者に指導するのではなく、教材を開発する際の原理としても本稿で論じたような事柄に留意することは有意義であると思われる。

引用文献

- 隈部直光(2002)『教えるための英文法』リーベル出版 p.1
 渋谷澄(1981)「学校文法における文型—特にS + V + O + to-infinitiveを中心に—」『研究紀要』No.3 pp.21-29所収 東北英語教育学会 p.21
 細江逸記(1999)『英文法汎論 改訂新版』篠崎書林 p.25
 毛利可信(1972)『意味論からみた英文法』大修館書店 p.112

参考文献

- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., and Svartvik, J. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language* Longman

Yano, J (1996) "The Usefulness of the Five Sentence Patterns in Understanding English" in *LEO* No.25 pp.43-66 東京学芸大学大学院英語研究会

安藤貞雄(1983)『英語教師の文法研究』大修館書店

池上嘉彦(1991)『<英文法>を考える』筑摩書房

黒川泰男(1996)「5文型と副詞」『新英語教育』1996年12月号 pp.iv-vi 所収 三友社出版

黒川泰男(1997)「動詞句と5文型」『新英語教育』1997年10月号 pp.iv-vi 所収 三友社出版

小寺茂明(1986)『英語教育と英語学研究』山口書店

小寺茂明(1989)『日英語の対比で教える英作文』大修館書店

田地野彰(1999)『「創る英語」を楽しむ』丸善

田鍋薫(2000)『英文読解のプロセスと指導』溪水社

吉田正治(1995)『英語教師のための英文法』研究社出版

(滋賀県立安曇川高等学校教諭)

ウェブサイト:

<http://hb8.seikyou.ne.jp/home/amtrs/>